

上部消化管の平滑筋腫瘍の評価のための超音波内視鏡検査：42 例の経験

Endoscopic ultrasonography for the evaluation of smooth muscle tumors in the upper gastrointestinal tract: an experience with 42 cases: Tio TL, et al (Gastrointest Endosc 36: 342-350, 1990)

EUS が実施された 12 人の平滑筋腫疑いの患者 (Group 1) と 12 人の平滑筋肉腫疑いの患者 (Group 2) が手術された。良性と判定された根拠は固有筋層と連続する境界明瞭な均一な低エコーの腫瘍で周囲の組織に浸潤する所見やリンパ節転移を認めないものである。平滑筋腫の疑い症例は病変が大きいため、あるいは出血のために切除された。悪性との診断は辺縁が不整で不均一な低エコーの腫瘍である場合や周囲の臓器に浸

潤する所見を有する場合になされた。Group 1 は平滑筋腫 10 例、結節状の辺縁を有する胃潰瘍 1 例、食道壁に浸潤した気管支のカルチノイド 1 例で EUS の正診率は 83% であった。Group 2 では平滑筋肉腫 7 例、平滑筋芽細胞腫 3 例、膠様腺癌 1 例、気管支の癌 1 例であり、正診率は内視鏡 50%、X 線検査 42%、CT 50%、EUS 83% で EUS が勝っていた。

また、18 例の粘膜下腫瘍が良性として EUS、内視鏡、CT で経過観察された (Group 3)。EUS の診断は平滑筋腫 14 例、食道静脈瘤 1 例、脂肪腫 1 例、迷入脾 2 例で、1～3 年の経過観察で大きさ、内部エコーいずれも変化を認めなかった。

EUS は他の画像診断に比し、胃壁内の異常や周辺のリンパ節を明瞭に描出することができるため、平滑筋由来の腫瘍の診断や、staging、

粘膜下腫瘍の経過観察手段として優れていた。著者らは粘膜下腫瘍の治療方針を次のように述べている。4 cm 以下の粘膜下腫瘍で出血や閉塞を認めず内視鏡や EUS でも悪性所見を認めないものは 3 か月ごとの経過観察でよい。悪性を疑う場合は EUS guide の細胞診を施行すべきである。細胞診が陰性でも悪性是否定されず、4 週ごとの経過観察で内部エコーの変化や境界、大きさの変化が認められた場合、手術が勧められる。

【訳者コメント】 筋原性腫瘍の良・悪性の鑑別は組織学的にも困難な場合があり、EUS 診断も著者らの言うほどは容易ではない。われわれは腫瘍内部の不整な低エコー領域の存在が悪性を強く疑う所見と考えている。

(愛知県がんセンター消化器内科

中村常哉 抄)

炎症性腸疾患患者の妊娠における Azathioprine 使用の安全性

Safety of azathioprine in pregnancy in inflammatory bowel disease: Alstead EM, et al (Gastroenterology 99: 443-446, 1990)

azathioprine は、高用量の動物実験で催奇形性がみられるが、人間では認められていない。実際、腎移植を受けた患者や全身性エリテマトーデス患者の妊娠の際、azathioprine が安全に使用されたことが報告されている。しかし、炎症性腸疾患では、意見の統一がみられないため、著者らはこの点について検討した。

平均年齢 28 歳の 14 人の婦人 (16 回の妊娠) を対象とした。妊娠までの平均病歴期間は 4.4 年で、azathioprine の平均服用期間は 6 か月から 5 年であった。12 人は prednisolone、6 人は sulfasalazine、

1 人は mesalazine を併用していた。また、8 人に手術歴があった。2 人が azathioprine を妊娠期間中服用していたが、5 人は妊娠 16 週未満で服用を中止した。2 人は医師の勧めで、3 人は自分で服用を中止した。他の 2 人は azathioprine を服用中に妊娠したが、1 人は医師の勧めで、1 人は精神社会学的理由から中絶した。妊娠中の併発症は B 型肝炎の 1 例のみであった。14 人の出産については、9 人は正常分娩で、5 人は帝王切開であった。それらのうち 1 人は、35 週で健康な双子が生まれ、1 人は前置胎盤のために帝王切開が施行され早産であった。満期安産の新生児は全員 2.5 kg 以上であった。また、出生まもなくチアノーゼを来した 1 例はあったが、先天性奇形や周産期のトラブルも経験しなかった。その後、15 人の子供 (女 6, 男 9) は順調に育ち、特に感染にかかりや

すいわけでもなく、小児癌も発生しなかった。

azathioprine は胎児に影響を与え、催奇形、遺伝子異常、免疫および血液異常、流産などをもたらす可能性があり、azathioprine を服用していた母親の子供にリンパ球減少、血小板減少、低ガンマグロブリン血症、サイトメガロウイルス感染のみられたという報告もある。

しかし今回の検討では、炎症性腸疾患に使用する量では胎児に危害はなかったと思われ、最近では、著者らは azathioprine を服用している患者が妊娠した場合、それが病気のコントロールに重要な役割を果たしているときには、患者が服用を望まない場合以外は、十分薬剤の安全性を説明し継続することにしていると述べている。

(愛知県がんセンター病院消化器内科
松浦 昭 抄)